

日曜聖書講筵（婦選会館 公開集会）

エパタ！

――マルコ伝第7章31～37節――

1964年12月6日

小池辰雄

聖霊の呻き キリストの碎け 十方坐断 キリストの本願 開けのキリスト 十字架という開
けの門 一句截流 開かれたる魂 天国の開示

【マルコ7・31～37】

31 イエス又ツロの地方を去りて、シドンを過ぎ、デカポリスの地方を経て、ガリラヤの海に來り給う。32 人々、耳聾にして物言うこと難き者を連れ來りて、之に手をおき給わんことを願う。33 イエス群衆の中より、彼をひとり連れ出し、その両耳に指をさし入れ、また唾して其の舌に触り、34 天を仰ぎて嘆じ、その人に対して『エパタ』と言ひ給う、ひらけよとの意なり。35 斯てその耳ひらけ、舌の縛ただちに融け、正しく物いえり。36 イエス誰にも告ぐなと人々を戒めたもう。然れど戒むるほど反つていよいよ言ひ弘めたり。37 また甚だしく打驚きて言う『かれの爲しし事は皆よし、耳聾をも聞こえしめ、唾者をも物いわしむ』

●聖霊の呻き

31 イエス又ツロの地方を去りて、シドンを過ぎ、デカポリスの地方を経て、ガリラヤの海に來り給う。

「ツロの地方を去りて、シドンを過ぎ、デカポリスの地方を経て」

とありますが、この経路を見ると、かなり迂路を通つて歩かれた。そこで、学者が「ちよつと順序がおかしいのではないか」

と言う人もあるが、それはどうでもいいです。「デカポリス」は「十の町」という意味で、これも異邦の方ですが、また再びガリラヤの方に歸つてこられた。

32 人々、耳聾にして物言うこと難き者を連れ來りて、

少しはどもつていたかも知れないけれども、大体、聾者であるともものも言えないということが普通です。既にイエスのことは遍く聞こえているものですから、やつて來まして、

之に手をおき給わんことを願う。

と。ところが、



33 イエス群衆の中より、彼をひとり連れ出し、騒がしいので、ひとり連れだされて、次のようにされた。その両耳に指をさし入れ、また唾^{つばき}して其の舌に触り、実に詳しく書いてある。

34 天を仰ぎて嘆じ、その人^{むか}に対して『エパタ』^{こころ}と言い給う、ひらけよとの意なり。

「嘆じ」とありますが、これは「嘆ずる」というと、何か嘆くようですけれども、嘆きの気持もありかもしれませんが、非常な呻^{うめ}きです。言葉にならない深い祈りです。そして、イエスは瞬間で神の世界に、神の霊と一つになられます。これが

「天を仰ぎて呻き」

ということです。ローマ書8章26節に、

「26 斯くのごとく御霊も我らの弱^{よわき}を助けたもう。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難き嘆きをもて執成し給う。」（ロマ8・26）

とある。これも「嘆き」と書いてありますが、「呻き」です。

「御霊みずから言い難き呻^{うめ}きをもて執成し給う」

ということ。聖霊の呻きです。

とにかく、今のキリスト教界で一番欠けているものは、何と言っても、魂を打ち込んでの――あるいは呻きとなり、あるいは叫びとなる――そういう祈りです。聖書の研究をどんなにしましても。私は無教会に育ちましたけれども、先生方はみな立派な方々です。また、聖書の解説も実に立派なものです。けれども、解説にしても何にしても、本当の祈り、本当の呻き、本当の叫びがそういった魂から発していなければ、人の魂に本当に訴えない。魂の震撼の世界には、どうしても、我々の魂が神さまと本当にそのような交わりの世界にいないと、来ない。これは何年、教会に通おうが、あるいは集会に通おうがダメです。

私は来年、幕屋創立25周年を迎えますが、皆さんが何より本当の祈りの人になっていたいただきたい。ただその一念です。それが何を意味するかは、皆さんが自分で体験なさらないと分らない。その祈りが何か角度がずれていたら、これはダメなんです。神さまの方を向いていると思ったところが、それがまだ30度ずれていた。40度ずれていた。90度ずれていた。人の気持を考えていたり、自分というものの体裁をもっていたり。それでは祈りが本当の祈りにならない。私は朝に晩に床^{とこ}の上に端坐して祈ります。また書斎でももちろん祈ります。電車の中でも、目をつぶれば、祈りの世界に入ります。

とにかく、私がいわゆる無教会とどうしても袂^{たもと}を別つようになったのは、また、彼らが私や手島さんをそのように取り扱われたのは、我々が祈りの世界で次元の違ったところに来たからなんです。どこの集会にしようが、カトリックにしようが、プロテスタントにしようが、そんなことは問題でない。「キリストの体^{からだ}」と言われるのなら――体なんですから、



体は頭と離れているものではない——キリストの体からだとしての私たちが、私たちの頭であり首かしらであるこのキリストと深く交わるわけです。

●キリストの砕け

パウロは、

「我は罪びとの首かしらである」

と言つて嘆き、

「ああ、この死の体からだより我を救はんものは誰であるか」

と、偉大な使徒パウロがあのように叫んだ。

法然も、どうにもならん。煩惱を去ろうとしても去れない。菩提の境地に入ろうとしても、入れない。とうとう、

「南無阿弥陀仏」

の称名しょうみょうの一言になつてしまった。あれが祈りです。日蓮も

「南無妙法蓮華経」

の一句に凝集してしまった。これが本当の祈りです。私たちがまた、

「主イエス・キリスト！」

と叫ぶことが一番の祈りなんです。「主よ！」と。どうして、今のクリスチャンは、この祈りを何か非常に難しいことにしてしまっているだろうか。

「主さま！ お父さま！」

と、この一言が——全身をもつて祈るときに直ちに父の懷に入る——これが祈りです。どうか、特に青年諸君が、大胆率直にこの祈りの世界にグングン入っていただきたい、こう思うわけです。

パウロは、「我は罪びとの首」と言った。けれども、主イエス・キリストが即ち、私たちの罪びとの首になつてくださった。これがイザヤ書53章です。私たちの罪を全部引き受けたのが、これが「罪びとの首」ということです。そして、キリストはその一切を引きうけて、自分を最悪人として十字架に架かった。最悪人として極刑を受けられた。これは普通の十字架とは意味がちがう。

私たちはいくら平伏ひれふしても、どうにもならん。いくら砕けようとしても、どうにもならん。そのことは大事なんです。平伏そうとし砕けることは大事なんです。けれども、私たちは、それでもどうにもならん。我々の悔改めそのものが当てにならない。キリストはそれを本当に引きうけて、

「私がお前のその一切を受けた。もう心配はいらん。どんな心の状態でもよろしい。

そのままで来なさい」

と。これがイエス・キリストの砕けです。



このことは、第2号（「曠愛新書」第2号）で私が『天路』という論文——私は今度はそれに「霊的」と冠しました。文章は昔のままですけれども、「霊的神学的信仰告白」と題して、これから第一、第二、第三とずっと続けて、私のそういった角度のものを連載したいと思っています。その第一が、この1937年の藤井武記念講演で『別の道』と題したあの題です——これを『天路』と題して今度は書き、またその次は、「終末的実存者」というこの「者」を取って、『終末的実存』という題で、この二つを載せてありますから、これはよく読んでいただきたい。これは徹底的に書いてあります。

けれども、御霊の世界の積極的な面はまだそこには出てない。私の信仰の段階があります。それへの道標みちしるべです。やがて、聖霊の突破がだんだん出てまいりますけれども、しかし、その前段階として極めて大事なところですよ。

またそれと同時に、『桑の木によじのぼる』というザアカイのことが、徹底的に聖霊の世界がそこにぶちまけてある。これと合わせてお読みになれば、第2号の面目躍如たるものがありますから。このクリスマスに私が皆さんに贈るものとして、第2号がもうじきできるのが非常にうれしい。どうか、私は大胆に申し上げますが、それをどしどし伝道に使っていただきたいと思います。

34天を仰ぎて嘆じ、その人むかに対して『エパタ』と言い給う、ひらけよとの意こころなり。

ヘブライ語で「エッパター」と言うんですが、

「開かれてあれよ、開かれよ」

という当時のアラミ語です。「開けよ」でもいいけれども、本来は「開かれよ」という意味です。もちろん、キリストは神さまの御力を今いただきましたから、そこで、「エパタ」と言われたときに同時に、

「わが言は霊なり、生命なり」

で、聾者のものが開かれた。その時に、キリストは指と言葉と両方をもってされた。言行一如です。指をもって触れられたことも、言葉を発せられることも、みなこれはキリストにとっては神の力を受けとった祈りそのもの、本願そのものなんです。神の本願そのものが、このイエスを通してその人に顕れた。

●十方坐断

この「開」という字が大事です。『碧巖録』の第三二則へきがん（臨濟仏法大意にこういう言葉がある。

「十方坐断、千眼頓開、

一句截流、万機寢削」

（じゅつぱう ざだん 十方を坐断して、せんがんとみ 千眼頓に開け、

せつる 一句に截流して、ばんきしんさく 万機寢削す。）



（一言の下にあらゆる意識の流れが断ち切られて、全ての作用が消えてしまった）

「十方を坐断す」という。「十方」というのは、東西南北とその中間の四隅と上下とのことです。立体的に考えているわけです。これを「十方」という。ローソクの光でも、これは十方に輝く。言うまでもなく、太陽も十方に輝く。「坐断」というのは、坐禅をして、その悟りの世界でそれを断つてしまうことです。いわゆる、迷悟凡聖、上下貴賤、老若男女、大小広狭、天地四方、あらゆる森羅万象の一切の差別相というものを断破する。それを「坐断」という。そうすると、「千眼頓に開ける」という。

千手観音なんてありますね。あの「千手」というのはもちろん、救いがどんな者に対しても千の手をもって救うがごとくに自在に救うことが、あの「千手」の意だと思いますが。妙な仏像を見て、妙な偶像だなんて思うが、それは見たところは妙だけれども、その意はすべての者を済度するということです。これは千の眼が開かれる。千眼がとみに、直ちに開かれる。いわゆる迷っているとか、悟っているとか、自分は凡人であるとか、彼は聖人であるとか、そういった差別相をもうひとつ乗り越えてしまう。

これはキリストの福音の光でこの句を読むと、よく分かる。いわゆる類型的に平等にすることではない。万象はみなそれぞれ差別があつていい。むしろ、それぞれ特殊な相でなければならぬ。いろいろであつていい。いろいろであるが、そのいろいろな状態、それをもはや比較研究するような差別としては取り扱わない。その特殊性をそれにおいて本当に肯定していく。一番深いところからそれを肯定していく。これはパウロが福音の中で言っているとおります。

「ギリシャ人もユダヤ人もない。男も女もない。皆、キリストの前には一つだ」

なんていうことを言っているでしょ。あのことなんです。あれがこれなんです。富めるも貧しくもない。みな一つだと。そこにおいて神の栄光が、どういうところにも神の栄光が顕れる。神の栄光が顕れるということにおいて一つだということです。そのそれぞれの特殊性はそれでよい。みな大いに差別があつていい。千差は万別であつてよい。それを手放しに比較したら、何になるか。比較ではない。それが渾然として大きな調和をなすには、そこに本当にキリストにあつて、在らしめられているということ。「在らしめる」というのは、力をもって在らしめているんです。生命をもって在らしめている。愛をもって在らしめている。その在らしめるところのこのキリストの、

「直き者にも悪しき者にも、正しき者にも正しからざる者にも、雨を降らせ、

陽を照らす」

というあの句がイエス・キリストの最大の言葉だと私は思う。そして、その次に、

「汝ら、父の全きが如く全かれ」

と言われた。本当の全さというものは一切のものを無条件に受けとつて、これを本当に神の光の栄光体と化する、これが全さです。決して審かない。これを本当に救いあげてしまう。



●キリストの本願

そういう角度の積極的な明るいこの福音が今どこで本当に叫ばれているだろうか。キリスト教界は、なぜこんなに神経衰弱だか、神経質だか、小さくなってしまうだろうか。それは、この胸三寸の中にキリストの光をいただいていないからです。絶対恩寵をなぜ、絶対として受けとらないか。

「それでも、私の信仰は。それでも、私の実存は。それでも、私の聖書知識は」と、なぜ自分を見ているか。

「私の本来の性質はどうである」

なんて、何だっという。

「彼は聖である。私は凡人である」

と言って、なぜ差別するかということです。この

「差別を撤廃する」

ということとは、

「義人なし、一人だになし」

と、パウロが言ったとおりです。いや、大いにそれはそれぞれの相対性において、その奥に神・キリストの絶対なるものを受けとらなかつたら、みな空しい。

そういうように、キリストは、その塞ぐ心を開いてくださったんです。私は今日、本当に来ていただきたい人が幾人かいたけれども、残念です。どうか、録音で聞かしてあげてください。本当に開かれた心です。何か自分の状態が悪いというと、

「集会に、どうも、来るのがどうのこうの」

と、何を言っているか。悪いからこそ、車に乗ってでも来なさい。担架に乗ってでも来なさい。これが私の中にある呻きなんです。

キリストはそのようにして、呻いて、聾の人に神さまの愛の生命をそのまま注がれる。こないだから申している通り、そういったキリストの本願です。どうぞ、皆さんは、この「本願」という、本来日本人がその歴史において賜っているところの素晴らしい言葉を、福音的にしっかりと身につけていただきたい。キリストの本願は、自分の側のいかにかわらず、驚くべき救いをもっている。驚くべき力をもっている。どんなことがあっても、私は救われていくんだと。そのように、主イエス・キリストの本願がある。大丈夫だ、心配はいらん。「主さまー」と。過去のことはどうでもいい。常に永遠の現在・未来を引き寄せるような驚くべき現実を展開してください。そうでなくて、何の信仰か。

●開けのキリスト

この「開く」ということ。今日、この「開」という一字を皆さんが本当に受けとって、魂の開魂にならなくては。パウロもダマスコ途上でキリストの光に撃たれて、一遍、眼が



見えなくなってしまう。ものが言えなくなってしまう。耳が聞こえなくなってしまう。どうにもならん。霊にすっかり撃たれてしまった。これは本当にパウロをして開眼せしめるためである。キリストの十字架が――「何を意味するか」ではない――現実^{現実}に何であるかを、パウロに示さんがためであつた。キリストの復活がいかなることであるかをパウロに受けとらしめんがためであつた。聖霊がいかに彼の生命となつて、

「この福音の展開をお前を通してやるぞ」

と、キリストはこのパウロにかかつて来られた。こんな素晴らしいパウロの回心の事態を、今のクリスチャンはどんな気持ちで読んでいるかと思う。

「開眼」であり、この場合は「開耳」である。また、開心、開魂――心と言おうが、魂と言おうがかまわない――心を開くということだ。

人間は、地理的にいろいろ制限を受けます。ドイツ人、またイタリア人、日本人、ロシア人、みな距離的地理的環境や歴史的な限定でもつて、人間のいろいろな、ある程度の類型というものがある。同じ日本の中でも、北海道、東北、関東、信州、関西、九州、みなちよつと人の性格に、いろいろな型がある。すべてそうだとは言いませんよ。いろいろですから。九州の人でありながら、ちつとも九州らしくないものもあるし、東北の人でありながら、ちつとも東北らしくないものもあります。それはいろいろですけれども、地方色というものはまあるものです。しかしながら、どうか、皆さんは、そういったいろんな地方色でもつて

「私は九州人だから。私は東北人だから」

なんて、決め込まないように。神さまによつて開かれるのは、どんな今までの自分の生まれつきの特殊性という限界がありましても、そんな限界は突破します。これが聖霊の世界です。聖霊の世界は一切のそういったような限界を突破させる、開かしめる。

私も自分の信仰で、この「開け！」という世界に来るまでは本ものではなかった。それはキリストの砕けを通したんですけれども。このキリストの十字架の砕けを通して、この「開け」は復活の世界です。イエス・キリストの復活の生命、甦りて甦れ給うたところの霊体のキリストは「開け」のキリストです。十字架は砕けのキリストだが、この復活のキリストは開けのキリストである。こんなことを言つたのは今日初めてだ。本当にそうだ。開けのキリストという、このキリストにぶつからないとね。砕けと開けです。もうこれは一如です。これは裏表で、離すわけにはいかん。本当に砕けを受けとらなければ、本当に開かれない。その転換をさせるものは聖霊の世界です。だから、十字架と聖霊と復活の事態は絶対に切ることができない。

●十字架という開けの門

黙示録を開いてください。黙示録3章7節から、

「7ヒラデルヒヤにある教会の使に書きおくれ。「聖なるもの真なる者^{まこと}、ダビ



デの鍵を持ちて、開けば閉ずる者なく、閉ずれば開く者なき者かく言う、
8 われ汝の行為を知る、視よ、我なんじの前に開けたる門を置く、これを閉
じ得る者なし。汝すこしの力ありて我が言を守り、我が名を否まざりき。」（黙
示録3:7、8）
とある。

「我なんじの前に開けたる門を置く」

と。キリストは私たちの前に、開けた門を置いていらつしやる。十字架は門であると私は
言いました。救いに至る門であるが、この十字架は即ち実は、閉じているようで、碎けの
門であると同時に開けの門である。十字架という開けの門から、もう燦々^{さん}とキリストの復
活の光が、御霊の光がこちらに押し寄せてきている。

皆さん、居ても立ってもいられないような、そういう受け方をしていかなければダメで
すぞ。聖書研究会なんて、そんなものはもうよした方がいい。

「もう、あなた方とは違う世界にある。この福音の世界はそれとは違うんだ。そう
じゃないよ」

と――言う必要はないけれども――それだけの自信をいただかなくては。ということとは、
何も人をけなすということではない。

「どうか、こちらにお入りください」

と、引つ張っていく。「こちらに」というのは、何も集会に來いということではない。

「このキリストの世界に本当に入ってください。本当に、そんなことではもうお氣
の毒だ。私の魂はあなたのために呻く」

と。こういう氣持で本当に人をこの喜びの世界に入れられないというのが、パ
ウロの

「やむを得ざるなり。キリストに呪われても、私の兄弟のためにこの福音を宣
べ伝えないではいられない」

と、パウロがあんな切ない言葉を吐くのは、彼の中にそのような開かれたる世界が輝いて
いたからです。皆さん、もう、くすぶりクリスチャンはやめよう、もしくはすぶっていたら、
行き詰まっている人、悲しんでいる人を、どうか、尋ねていつて、そして、

「本当に大丈夫ですよ」

と言つて、この開かれたる門の中に入れてあげてください。あなた方自身が即ち、開かれ
たる門となる。魂が本当に開かれている。だから、

「開けたる門を置く」

という、この門の鍵を持つものはイエス・キリストである。黙示録5章を見ましても、

「2 また大声に『巻物を開きてその封印を解くに相応しき者は誰ぞ』と呼わる^{よば}
強き御使を見たり。3 然るに天にも地にも、地の下にも、巻物を開きて之を



「見得る者なかりき。」

とある。また、

「視よ、我戸の外に立ちて、人もしわが声を聞きて、戸を開かば、その内に入つていくぞ」

と。開こうとする念願は大事です。けれども、念願だけではどうにもならん。キリストは、開いてくださる。開こうとしても、開けないかもしれない。何か魂がさびついてしまつてね。けれども、キリストはちゃんと油を塗つて、これを開くようにしてくださる。聖霊という油を塗つて。どんなに塞ぎましても絶対に、

「どうも私はなかなか開けません」

なんて言わせませんよ。我々の魂というやつかいなやつの門を開く鍵は、イエス・キリストが持つておられる。既に十字架によつてもう開かれていゝという事態なんです。

「閉じているが如くに」

というが、実はもう開いている。ちつとも閉じていやしない。開かれた門ということです。

●一句截流^{せつる}

だから、

「十方坐断して、千眼頓^{にわか}に開く」

というのは、人間のものの比較研究なんか要らんということです。東西南北、四位上下というこの十方は、私たちが坐断するということは――キリストの懷の中に本当に坐りこんでござらん――そうしたら、もう

「汝、人を審くなかれ」

なんかどこかへいつてしまうから。くだらない妬^{ねた}みだとか、嫉^{そね}みだとかや何かはみんなすつ飛んでいつてしまうから。イエス・キリストの懷の中に本当に入つてござらん。

「ああい。どうでもよろしい。大丈夫だ」

と。どういう人に向かつてても、向こうがどうこつちを迫害しようが、審^{しる}こうが、どっこい、みんなこつちが全部それを包んでしまう。それだけのものがこの「坐断する」というんです。「坐断」どころでない。坐抱でもいい。坐つていて全部を抱いてしまう。

そういったような具合に、この福音の世界は碧巖録の世界よりももうひとつ上なんだ。そうしたらば、千眼頓^{にわか}に開ける。千里眼と読んだつて、何と読んでもいい。本当の眼が開ける。本当の眼が開けて、本当の認識ができる。眼が開けるとは相手を救わんとする認識です。パウロは本当に眼が開けたから、何という素晴らしいキリストの福音の証者となつたか。眼が開けてきたらば、その人は本当に証者となる。これは証者となるんですよ。

「一句截流^{せつる}」

という。おもしろい句だね。「截流^{せつる}」というのは、衆流を裁断することだそうです。諸々の



流れを截^たってしまう。諸々の流れというのは煩悩^{ぼんのう}のいろんな働きらしい。雑念妄想ですから、要するに煩悩みたいなのです。雑念妄想を全部截^{せつ}ってしまう。「一句」というのは、仏法のどれでもいい。仏法の一句。聖書の一言、キリストの一言です。

ルターの「神はわが固き櫓^{やぐら}なり」という讚美歌の中に、

「キリストの一言が彼（サタン）を倒す」

とある。

「キリスト！」「十字架！」「主の御霊！」

と呼べば、サタンは逃げていつてしまう。これはルター自身が体験したから、ああいうことを言ったんです。だから、私たちは聖書の御言を身に体することが大事です。

一番大事なことは何といつても、あるがまま、そのままキリストの懷の中に自分を投げかけることです。これが祈り中の祈りです。そういう意味で、少し乱暴な言葉を使えば、ずぶとい魂にならなければダメですよ。「ずぶとい」というのは横着ということではない。

「神経質でなくてよろしい。心配要らんよ」

ということ。キリストは

「何も心配要らんよ」

と言つてくださる。どうも、人間というものはすぐとやかくいろんなことを考えたがつてしょうがない。

「幼子^{おさない}の如くなれ」

ということです。「おかあちゃん！」と云えばいい。

聖書の「一句」、一言というものが叫ぶときに、もう直ちに聖霊^{せいれい}の力です。それで一切の雑念を「截流^{せつる}」してしまう。

「万機^{ばんきしんさく}寝削^{ねさく}」

という。これは仏教の世界だから、「万機」というのはこの場合は、いろんな煩悩の働きなんだ。万機がみな休止してしまう、止まってしまう。

それは仏教的角度ですからね。けれども、万機寝削でなくて、万機が本当の意味で発動する。万機とは――今度は別な意味で――我々の賜りたる一切の衝動、働き、才能、能力、これはみんなキリストの力でもって自由自在に輝かしく働きをなす。これが福音の世界の積極的な素晴らしきなんです。創造的なんです。悟りの世界とはそこが違う。創造的であり、本当の意味で救済的である。「創造と救済」というようなことを神学的に言うけれども――何も神学なんかどうだっていい――本当に創造的であると同時に、それは救済的な創造です。神の栄光――「ドクソロギー」というけれども――またそれが同時に神の栄光の現れである。みんなこれは一つなんです、創造も救済も栄光の現れも。



●開かれたる魂

それがこの「開け」の現実です。そのようなキリストの開けの門に私たちは入ってしまったんだ。だから、皆さんは――「胸襟きょうきんを開いて」と言うでしょ――本当に胸襟を開いた人として、策略しようとしたって策略しようがない。胸襟を開いたあの輝き、これには参りましたということです。そして、本当にそのような世界に入ろう。何と自由だろう。何とまた暖かいだろう。何と輝やかしいだろう。これが開かれたる魂です。今度は本当に、開かれたる魂として、御霊の人たちはみなこの開かれたる魂です。キリストが、

「開かれてあれよ！ わが力を受けて、開かれてあれよ」

と。「エパタ！」というこのキリストの恵み深き御言を、キリストはいつも、私たちが何か曇ってしまったようなときに、魂の雲の奥から発してください。聖霊の光が貫くことのできない、浸透することのできない曇りはひとつもない。この聖霊の光によって浸透されると、

「どんな暗闇もお汝の光によりて」

とミカ書に書いてある。ちつとも恐くもなければ、暗くもない。ここに目のご不自由な方があるが、「あなたのみ光によつて」と言つて、そのようなキリストの光でもつて歩いていらつしやるから、お歩きになる。目の開いているやつは、私たちは本当にダメですよ。

そういう、開かれたところの魂です。信仰者とはそのように開かれたる魂をもつものなりということですよ。いいですか。だから、もう何とも言えないです、この福音の世界の素晴らしきは。そこで私たちの耳が福音に対して開かれ、目がこのキリストに開かれる。

どうか、そういうわけで、開眼されて、目が開かれて、イエス・キリストのみ姿を福音書においてつらつら見てください。私は生涯を通じて、福音書ほど慕わしい書はおそらくもう出てこないと思う。何と言つても、全聖書の中で福音書は中心です。アルファでオメガです。福音書を読みながら、キリストのみ姿を、開かれたる眼をもつて見る。また、このキリストの聖霊の世界は、創世記から黙示録まで貫いてますが、パウロの書簡なんかにもわんざと出てきますが、この聖霊の事態を本当に開かれたる心、魂をもつてこれを受けとる。私もこの御霊の生命で心が開かれて、もう閉じようがない。閉じたら必ずダメになる。

●天国の開示

また、開かれたる口をもつて。第三イザヤに、

「その口に聖霊を注ぎ込む」

というような言葉がある。イザヤ書59章21節、

「21 エホバいい給わく、なんじの上にあるわが霊、なんじの口におきたるわがことばは、今よりのち永遠になんじの口より、なんじの裔すえの口より、汝のすえの裔の口より、はなれざるべし。わがかれらにたつる契約はこれなりと。此はエホバのみことばなり。」（イザヤ59・21）



「わが霊がその口から離れることがない」

と。これが預言者への新しき契約です。新しき契約は、イザヤやエレミヤやエゼキエルに語られている。エレミヤ記33章31節にも書いてある。即ち、口を開けば、この口は何を称えるか。あの法然、親鸞のごとく、称名、しょうみょう、即ち聖名を称える。

「みな聖名によりて」

と祈りの世界でも言うでしょ。「聖名によりて」というのは、ちょっと、さしみのつまみに付け加えた言葉ではダメですよ。「聖名により」というのが本当の中心だから。キリストの聖名を口から語り、称え、讃美する。「讃美」というのは聖名の讃美だから。そして、耳をよく開いて。

「聞く耳ある者は聞くべし」

という。この開かれたる耳をもつて、御言に聞き入る。御姿にしろ、御言にしろ、御霊にしろ、みなこれは私たちの体内に化体かたいさせなければダメです。体に化さなくては。「キリストの体」と言うんだから、化体させないで、どうして信仰と言えるか。

音でも、「アイウエオ」の中で一番開かれた音は、「ア」です。ヘブライ語では「父よ」というのは「アツバー」ですから、開かれた言葉です。「イ」という発音は非常にいけない。悪魔のささやきみたいだ。ゲーテの『魔王』という詩の中で、魔王がささやく言葉の中にこの「イー」という発音がたくさんでてる。さすがに詩人ゲーテですね。そういう音の感覚がちゃんとわかっている。子どもの少し意地の悪いやつが「イーだ」なんて言う（笑）。あれはやっぱ音が自然にそういうように表れる。「イッヒヒ」なんて笑うやつは悪魔ですから、気をつけなさいといけない。「アーメン」と言うじゃないですか。「イーメン」なんて言いやしない（笑）。愛という言葉も「ア」で始まる。

さて、このイエス・キリストがかく盲人を開かれたこの現実を――私たちはいつもドラマの中に自分が入って――天を仰ぎて呻きて、私たちに本願をもつて臨んでくださるこの主イエス・キリストの御言とその指によって、私たちの魂が本当にこの十字架・復活のキリストの具体的な触れ合いによりまして、

「エパタ！」

となさるから、もう豁然かつぜんとして開かれる。もう、皆さん、何もくよくよすることはない。いいですか。そして前進してください。運命や環境が何だと、そんなものは。どしどし進んでください。神さまは、イエス・キリストはそのような人を天国の宝玉の如くに輝かしめ、そして、この地上に本当に天国を開示させてくださる。これも開示です。開き示すところの人である。では祈ります。

